

令和6年度
特選コース

第2回 入学試験問題 (2月3日 午後)

S特チャレンジ

国語 (50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都立大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

一 次の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、母屋で生活する。
- 2、遺失物を預かる。
- 3、歩合制の給料。
- 4、風邪の兆候がある。
- 5、作家を志す。
- 6、音楽にキョウウミがある。
- 7、時代のチョウリユウに乗る。
- 8、敵にセンセンを布告する。
- 9、電車はまもなくフツキユウする。
- 10、今年の冬もキビしい寒さだ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

朝起きて、ぼくはパジャマからTシャツとジーンズに着替えてダイニングルームに行った。

母親はキッチンルームにいて、食パンをトースターに入れていた。

「おはよう。父さんは？」

「ゴルフだって。朝早々に出ていったわよ」

「そっか」

「じゃあ、朝ご飯、作るね」

ぼくは、自分で作りたくて仕方がない。だけど、そう言い出せない。

ランチョンマットを二枚テーブルに置いて、朝食ができるのを待つ。

「お待たせ」

ソーセージとゆで玉子、レタスとトマトとモツァレラチーズのサラダ。ジュースにトースト。もちろん、ほくにも作れる。

「いただきます」

ほくは母親と一緒に食べ始めた。

「昨日のお父さん、お小遣いを止めるなんて、あんまりなことを言うわね。あの人が、なんでも自分の思い通りにしようとするから。それでね。お母さん考えたんだけど、どうせお小遣いはわたしが渡してただから、これまで通りあげるわ。お父さんには内緒よ」

正直ほくの心は揺れた。だけど、それだと母親に A される。

「いいよ。父さんに隠し事をするわけだし、気分が良くない」

「だけど、困るでしょう。お弁当作りももうやめるの?」

「母さんは、ほくが弁当を作るのは嫌なんですよ」

「そうよ」

「なら、どうして小遣いをくれるって言うの?」

「それは、タッチャンがお弁当を作り出す前からもらってたものでしょ。当然の権利だと思うわ。それを反故(ほんご)にしてしまうなんて、あの人が、本当に自分勝手なんだから」

「でも、母さんは、昨日、『しばらくなら、タッチャンも考え直してくれるかもしれないわね、お父さん』と、反対してくれなかったと思うけど」

「言っても無駄(むだ)でしょ。あの人は。だから、ああ言っておいたのよ」

母親の本当の気持ちはどこにあるのだろう。

「小遣いはいらさないよ。お年玉貯金を下ろすから」

「そんな。あれはタッチャンがいざというときのために、コツコツ貯めたものじゃない」

「今がその、^①いざというときだと思ってる。大丈夫だよ、母さん。小遣いをもらえなくても、中学時代はなんとかかなるから。もちろん弁当を作るお金も入れてね」

「お父さんが、通帳とキャッシュカードなんか渡すから、そんななまいきなことを言う子になったのね」

それはそうだ。ほくはそのお金があるから、こんな自信を見せているのだから。そのお金だって自分で稼(かせ)いだ物ではなくお年玉だ。

「お母さんがタッチャンに関わるのが、そこまで嫌なの」

今のほくにとつては、その通りだ。ほくは、できるだけ母親に近寄って欲しくない。ゾクツとしたくない。だけど、母親に対するそんなほくの気持ち、ひどいとも思ってしまう。

② ほくは、どう言えばいいのだろうか？

「もう、お母さんのことなんか、必要がないと思ってるのね」

「大げさだよ。でも、自分でできることは、自分でできるようになっていくのが大きくなるってことでしょ」

「お母さん、そんなの、さみしい……」

母親が下を向いて、つぶやくように言った。

なんだか、ほくのほうが年上みたいに思えてきた。

「お母さん、知ってるのよ」

母親がパツと顔を上げてほくを見た。

「え、何を？」

「朝、出かけるとき、タッチャンがお母さんが背中に触れるのを避けてること」

気付かれていた。

「そんなことないよ」と言おうとしたけど、できなかった。本当のことだったから。

「どうしてそんなことをするの。お母さんが嫌いなのか？ タッチャンは、ずっとお母さんのかわいい子どもでいて欲しいのに」

ゾクツときた。やっぱり母親はほくを **A** したいと望んでると思った。

きつとできない。

ほくにはわかった。

まるで小さな子どものように、ずっと任せっきりのほくが、母親には必要なんだ。

そう思うと、怖かった。 **D**、なんだかおかしくもなった。

いくらそう望んだって、ほくは嫌でも大人になってしまふのに。そんなことは長く続かないのに。というか、もう数年で終わるのに。

昨日の父親の態度もそうだけど、母親も大人に見えなかった。単なるだっ子に見えた。

大人っぽい子どもがいるように、子どもっぽい大人もいる。

「かわいいかどうかはわからないけれど、ほくはずっと母さんの子どもだよ」

言えたのはそれくらいだった。

部屋に戻^{もど}ってもう一度考えた。

父親にとって母親は、役割分担で家にいて欲しい存在だ。本当かどうかはわからないけれど、母親も同じ意見だ。

ぼくが勝手に弁当を作ったり洗濯^{せんたく}をしたりするのは、その関係にひびを入れることなのだろう。それが原因で、家ですることが減ってしまい、母親が働き出す気にもなったら父親は困るのだろう。

母親は母親で、家にいることの理由を家事とぼくに見出している。それなのに、ぼくが少しでも自分のことを自分でやり始めたら、家にいることの理由が減ってしまう。

でも、やっぱりぼくは思うのだ。母親はぼくのことにかまっていればかりいより、他に自分がしたいことを探したほうがいい。

そして、ぼくはといえば、弁当を作り、洗濯をし始めて、家族にひびを入れかけている。

ぼくがそうしたいから。

ぼくは父親のように、家で何もせず、ふんぞり返っているようなことはしたくない。いくら母親がそうしていいと言っても、そうして欲しいと言っても、ぼくは嫌だ。ぼくは、できる範囲だけでも、母親に任せず、自分のことをしたい。母親の大好きな息子だけに縛^{しば}られているつもりはない。結局それはカホが言っていたように自立なのかもしれないと思うけれど、そんなに大げさなつもりじゃない。ぼくはぼくでいいだけだ。

なんだか、バラバラな家族だな。

④でも、それも家族だ。

お昼前にぼくは部屋から出てダイニングルームに入った。母親はテーブルの上でタブレットを見ていた。

「今日のお昼ご飯を作らせてくれる？ 弁当のおかずの練習なんだけど」

母親の顔が曇る。ぼくは悪いなあと思いつつもそれに耐える。

「何を作りたいの？」

「レンジを使った簡単だし巻き玉子」

母親は何か言いたそうだったけれど、口を閉じた。

「玉子四個と、だししょうゆ使っている？」

「いいわよ」

ぼくはキッチンルームに入った。入り口で母親がぼくを見ている。ぼくはそれに耐える。

(中略)

「お待たせ」

できた料理をご飯と一緒に母親のランチョンマットの上に置いた。

「きれい」と母親が言った。

「でしょ。メインが一品なのがさみしいけど。何分？」

「え？」

「だから、できあがるまでに何分かかった？」

「計ってなかったわ」

「やっぱりこの前と同じ二十五分だよ。でもね、このだし巻き玉子も前日に作って冷ましておけばいいだけだし、弁当のおかずには便利だよ」

「勝手をして」

ぼくはその言葉を無視して言った。

「母さん、食べよう」

母親は黙って食べた。おいしいともまずいとも言わなかった。与えられた食事を残さないようにと食べているみたいだった。ぼく自身は、サラダもだし巻き玉子もおいしいと思った。^⑤ 自(1) 自(2) ってやつ。

食べ終わった皿を洗おうと立ち上がったたら、「作ってくれたんだから、わたしが洗うわよ」と母親が言って、それもそうだなと思ったぼくは座り直した。

「手際が良くなったわね」

キッチンルームから声がした。

「ありがとう」

そう言ってもらって、^⑥ 素直にうれしかった。

洗面所で歯を磨いてからぼくは、そっと、自分の顔を見た。どこか恥ずかしそうで、頼りない表情が映っていた。こんな情けない顔がぼくなんだ。自立からは遠い感じ。

それはそうだ。ぼくは弁当を作って、洗濯をして、たまに自分の朝ご飯を作ってるだけで、母親のように家事を全部こなしてるわけでも、父親のように外で稼いでるわけでもない。子どもだから当たり前だけど、ぼくはまだまだ自立なんかできない。

「ぼくたちは嫌でも大人になってしまっただから、^⑦そんな大人にならなければいいだけだよ」

一昨日ぼくはマサルにそう言った。ぼくは、父親や母親と違う人間になれるだろうか。

母親と父親の関係は、生まれてからはぼくも関係があるけれど、それでも根本的には二人の問題なのだろう。二人だけで始めたことなのだから。ぼくにはやっぱり手が出せない部分があるのだ。そして、ぼくはこの家族の子どもなのだから、ここで生きていくしかない。

いくしかないなんて後ろ向きだな。

生きていこう。

とりあえず、明日はナムルと切り干し大根を作ろう。

あ、明日は洗濯もあるな。どちらが先にするか、母親とはジャンケンで決めよう。

天気は良かったかな？

ぼくは、もう一度、今度はしっかりと自分の顔を見た。

^⑧ 晴れやかだった。

(ひこ・田中「あした、弁当を作る。」より)

(注1) 「反故にして」 …… なかったことにして。

(注2) 「カホ」 …… 「ぼく」の友だち。

(注3) 「マサル」 …… 「ぼく」の友だち。

問一、Aにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、説教　イ、保護　ウ、注意　エ、支配　オ、圧倒

問二、——線①「いざというとき」とは、どのようなことを指しますか。文章中の言葉を使って二十字以内で答えなさい。

問三、——線②「ぼくは、どう言えがいいのだろうか？」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、母親に対して、どうしても負の感情を持ってしまふことにいらだつ気持ち。

イ、母親の一挙手一投足に過敏になってしまう自分をあわれむ気持ち。

ウ、母親へ湧き上がる、今までにない思いにとまどいを持っている気持ち。

エ、自分に対して、とことん無理解な母親への怒りをおさえきれない気持ち。

問四、——線③「お母さんのかわいい子ども」とはどのようなことを意味しますか。文章中から二十五字で探し、最初と最後の五字をそれぞれ抜き出して答えなさい。

問五、BとDにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

- ア、だから　イ、すると　ウ、けれど　エ、しかも　オ、あるいは

問六、——線④「でも、それも家族だ」とありますが、ここから読み取れる「ぼく」の心情として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、家族の中での「子ども」としての役割を十分に理解した上で、その務めを果たそうと決意している。
- イ、家族関係を円満なものにしていくためには、それぞれの立場からの多様な視点が必要だと実感している。
- ウ、家族の抱く思いがそれぞれ異なることを自覚した上で、それも家族のあり方だと受け入れている。
- エ、家族間の意思疎通が難しくなっていることを意識し、理解し合うには時間が必要だと痛感している。

問七、——線⑤が「自分のことを自分でほめる」という意味になるように、(1)・(2)にあてはまる漢字をそれぞれ一字で答えなさい。

問八、——線⑥「素直にうれしかった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、今まで母親に純粹にほめてもらったことが一度もなかったから。
- イ、今まで料理を作るのに時間がかかりすぎるのが課題だったから。
- ウ、母親の家事の負担を少しでも軽くできたような気がしたから。
- エ、母親に初めて自分の成長を認めてもらえたような気がしたから。

問九、——線⑦「そんな大人」とありますが、それはどのような「大人」ですか。具体的に表している部分をここより前の文章中から十八字と二十三字で二箇所探し、最初と最後の三字をそれぞれ抜き出して答えなさい。

問十、——線⑧「晴れやかだった」とありますが、この場面における「ぼく」の心情として適当でないものを次からすべて選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、充実感
- イ、優越感
- ウ、意欲的
- エ、肯定的
- オ、自立心
- カ、親切心

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、省略した箇所があります。

① 世界は欲望の色を帯びている。ということは、つまり僕たちの生きづらさや不安、怒りなんかも、その理由の根本には、僕たちの何らかの欲望があるということだ。

(中略)

自分の欲望に思いついたとすれば、それだけで、僕たちはやり場のない怒りや不安とちよつとは折り合いをつけられるようになる。自分の感情の正体を知れば、それを制御することも可能になるのだ。

(中略)

欲望を知ること、自分と折り合う。これが、さまざまな実存的な悩みや生きづらさを克服するための、「欲望相関性の原理」②のひとつの応用の仕方なのだ。

その「折り合いのつけ方」のひとつを、一八世紀の哲学者ジャン・ジャック・ルソーの洞察(注)から想を得て、以下にちよつとご紹介してみたい。

『子どもの頃から哲学者』という本にも書いたことだけど、ルソーはその著書『エミール』の中で、不幸の本質を次のようにいい表している。すなわち、「不幸とは欲望と能力(注)のギャップである」。

とてもすぐれた洞察だと思う。

哲学は、物事の、あるいは問題の、本質を洞察することで、その問題を力強く解決するための、考え方(注)（原理）を提示する営みだ。

ルソーは不幸の、本質を洞察した。とすれば僕たちは、この、本質を手がかりに、不幸から抜け出すための方法もまた考えていけるようになる。

お金持ちになりたい。でも、どうがんばってもその見込みはない。

あの人に愛されたい。たまらなく愛されたい。でも、どうしても振り向いてくれない。

不幸や絶望は、そんな激しい欲望が叶わないところにやってくる。

そんな時、僕たちはいったいどうすればいいのだろうか？

不幸の本質が欲望と能力のギャップにあるのだとすれば、この不幸から逃れるための道は原理的に三つある。

一つは、いうまでもなく「A」こと。努力に努力を重ねて、お金持ちになる能力を身につける。愛される能力を身につける。それが一番望ましい道だろう。

でも、それは口でいうほど簡単なことじゃない。

そこで二つ目の道は、「B」こととなる。そんなに望ましいことではないかもしれないけど、欲望と能力のギャップがなくなれば、ひとまず不幸からは逃れることができる。

そして最後に、もしかしたらこれこそが不幸から逃れるための一番役に立つ考え方なんじゃないかという道がある。

「欲望を変える」という道がそれだ。

お金持ちへの欲望を、たとえば家族といっしょに過ごす欲望へと変える。

C

もちろん、それはひどくむずかしいことだ。でも、実は人間は、どんなに激しい欲望でも、意外に簡単に変えてしまうことができるものなのだ。欲望は変わる。これは僕たち人間の希望なのだ。

もちろん僕は、いついかなる時も欲望を変えよといっているわけじゃない。苦しくて苦しくて仕方がない時、僕たちには「欲望を変える」という選択肢もあるといっているだけだ。

③欲望の泥沼にはまったままもがきつづけるのは、ひどく苦しい。でも僕たちには、それまでの欲望とはまた別の欲望を豊かに生きる道だってあるのだ。

このことを自覚しているだけで、人生との向き合い方はきつと格段にちがってくるはずだ。

さて、ところが現代の僕たちには、近代人ルソーには思いもつかなかったもうひとつの不幸の本質がある。

自分の欲望が、そもそも何なのかが分からないという苦しみだ。

フランス革命前夜のルソーの時代、人びとは、絶対王政の社会の中で「自由に生きられない苦しみ」にもがいていた。

ひるがえって今、政治的自由や生き方の自由なんかを一応は手に入れた現代の僕たちは、むしろ「やりたいことが分からない」苦しみにもがいている。何をやるうがあなたの自由だ、どう生きたってかまわない、そういわれればいわれるほど、自分は何がしたいのか、どう生きれば幸せなのか分からない、④そんな不幸を僕たちは抱えることになったのだ。

世界は欲望の色を帯びている。だから、もし僕たちが欲望をほとんど持たなかったなら、世界からは彩りが失われてしまう。

好きな人ができた時、僕たちの世界は彩り豊かに華やき出す。本好きの人にとって、書店は胸躍らせる宝の山だ。起業家の目には、周囲の人も、最新テクノロジも、時事問題も、あらゆることが何かのチャンスのように映っているにちがいない。

でも、好きな人も、好きなことも、やりたいことも、何もなかったとしたら……。本屋はただの紙束置き場、周囲の人はしゃべる人形、といったくらいにしか、僕たちが思うことはないだろう。

D、そんな色のない世界が大して苦しいことじゃなかったら、そこには何の問題もない。世界から彩りを消し去り、空の世界に生きるのは、高度な悟りの境地といえなくもない。

E 仏教が説くように、過度の欲望を抑え、

でも、前述したように、F 自分の欲望が分からないことが苦しいことであるならば、僕たちはやっぱり、何らかの仕方でも欲望を見つけ出し、世界に彩りを与える必要がある。

そんな時、僕は学生たちに、次の二つの方法をアドバイスすることがある。

一つは、価値観や感受性を刺激するものにたくさん触れること、そしてその経験を、人と交換し合うことだ。

映画や小説、音楽など、自分の価値観や感受性を刺激するものに触れて、自分はどんな作品に心動かされるんだろうということを見つめてみる。そしてそれを、人と交換し合う。

そうすることで、僕たちは、自分はいったいどういう人間で、何を求め、どのように生きたいと思っているのかが、徐々に分かってくることもある。人とはちよつとちがう感受性に気づいたり、どんな人と共感し合えるのかを知ったりする。

迂遠な道のりのように思えるかもしれない。でも長い目で見れば、こうした経験を重ねることで、僕たちは ⑤ 自分の欲望を見つめ、これを育てていくことができるはずなのだ。

一方、何を見ても聞いても、心が動かされないということが時にある。映画も音楽も、全然心に響かない。そんな時も、人生にはしばしば訪れる。ひどいウツに陥った時とか、失恋した時とか、大きな夢が崩れ去った時なんかがそうだ。

そんな時、僕たちの欲望はすべて碎け散り、⑥ 世界はのつぺらぼうのように味気のないものになる。

前に何度か、僕たちは「事実の世界」を生きている前に「意味の世界」をこそ生きているというお話をした。ウツや失恋や挫折においては、この「意味の世界」が壊れ去ってしまうのだ。

そんな時に僕が推奨しているのは、「キッチン掃除メソッド」と呼んでいるものだ。

とりあえず、キッチン（トイレなんかでもよい）を掃除してみる。するとそこには、不思議なことになつとした「意味」の世界が現れる。掃除によって、僕は世界にほんのわずかの「意味」を与えたのだ。

何を大げさなふざけたことを、と思われるかもしれないけど、ウツや失恋や挫折に苦しんでいる人は、ダメされたと思ってぜひ試してもらえたらと思う。僕自身で実証済みの、意外にあなごれない方法なのだ。

何の欲望もないまま、ただ無心でキッチンを掃除していると、いつのまにか目に見えてキッチンが綺麗になつていたことに気づく。その時僕は、僕の存在が、この世界に少しばかりの「意味」を与えたことを知る。

そうして与えた小さな「意味」は、僕が自分にとっての「意味の世界」をもう一度結わえ直していく最初の結び目になる。

僕と世界はつながっている。そんなかすかな実感がやってくる。

その実感は、最初は弱々しく、でもじわりじわりと、僕たちのさまざまな欲望を再び起動させることになる。次はあれをやってみようかな、あれもちょっと面白そうだな……。そんなふうに、欲望の触手が少しずつ伸びていくのだ。

こうして世界は、再び豊かな彩りを取り戻すのだ。

(苦野一徳「はじめての哲学的思考」より)

(注1) 「洞察」 …… 目に見えない部分まで推察し、問題の本質や発言の裏にある意図を見抜くこと。

(注2) 「ギャップ」 …… 差。隔たり。

(注3) 「迂遠」 …… 遠回りな様。

(注4) 「ウツ」 …… 日常生活に支障が出るほどの強い気分の落ち込み、意欲の低下が続く病気のこと。

(注5) 「メソッド」 …… 方法。

問 一、——線①「世界は欲望の色を帯びている」とはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、世の中は、人々の希望や欲望が複雑に絡まりあって形成されているということ。

イ、世の中は、人々が希望や欲望をかき立てられるような華やかさに満ちているということ。

ウ、人々は、自分の希望や期待によって世の中を見て自分の世界を構築しているということ。

エ、人々は、自分が望む状況を実現させようと努力しながら世の中を見ているということ。

問 二、——線②「欲望相関性の原理」について、筆者は別の箇所です。空欄にあてはまる言葉を後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

第3講で、僕たちは「事実の世界」に先立って「意味の世界」を生きているというお話をした。どんな「事実」も、それに僕たちが「意味」を見出さないかぎり、僕たちにとっては存在しない。

この「意味の世界」というのは、言葉をかえれば欲望の世界のことだといっている。長寿や健康への欲望がなければ、人体メカニズムの「事実」は僕たちにとって存在しないし、農耕のための知識や夜空の美しさへの関心がなければ、天体法則の「事実」もなかったはずなのだ。世界はつねに、僕たちの欲望の色を帯びている。哲学者の竹田青嗣たけだせいじは、これを「欲望相関性の原理」と呼んでいる。文字通り、世界は僕たちの欲望に相関して————その姿を現すということだ。

- ア、欲望を叶えるために
- イ、欲望をあおるように
- ウ、欲望に先立って
- エ、欲望に応じて

問 三、A・Bにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- A—ア、能力を変える イ、能力を上げる ウ、能力を求める エ、能力を悟る
- B—ア、欲望を下げる イ、欲望を保つ ウ、欲望を克服する エ、欲望を無視する

問 四、 にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、お金持ちへの欲望を、愛してやまない人と共有し理解を求める。
- イ、お金持ちへの欲望を、愛してやまない人のために制御する。
- ウ、愛してやまない人の欲望の本質を理解して、別の欲望を提案する。
- エ、愛してやまない人を、どこか心の奥にしまって、また別の人を見つける。

問 五、——線③「欲望の泥沼にはまったままもがきつづける」とはどのような状態のことですか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

欲望と能力のギャップをいつまでも できない状態。

- ア、解消 イ、解除 ウ、消去 エ、削除

問 六、——線④「そんな不幸」とありますが、それはどのようなことですか。「〜ということ。」に続くように文章中の言葉を使って三十字以内で答えなさい。

問 七、 ～ にあてはまる言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

- ア、もしも イ、一方 ウ、むしろ エ、もつとも

問 八、——線⑤「自分の欲望を見つめ、これを育てていく」ことが望ましいのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、欲望を育てることで、誰もが豊かに生きられる世界を実現するため。
- イ、欲望を明確にすることで、自分の個性を把握してよりよく成長するため。
- ウ、適切な欲望を持つことで、自分の存在意義を認識して幸せに生きるため。
- エ、多くの欲望を持つことで、向上心をもって豊かに生きるため。

問 九、——線⑥「世界はのっぺらぼうのように味気のないものになる」と反対の意味になる言葉を文章中から十三字で探し、抜き出して答えなさい。

問 十、文章中で筆者が述べていることとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、自分の欲望を見つけることで欲望をコントロールする能力を高めることができ、自分らしく豊かに生きることができる。
- イ、自分の欲望を見つけ出し育てることで、自分と世界のつながりが実感でき、生き生きと豊かに生きることができる。
- ウ、自由に生きられる世の中では、自分の能力と欲望のギャップを調整する必要に迫られるため、価値観や感受性を常に磨き続けるべきである。
- エ、自由に生きられるようになると、自分にとって適切な欲望がわからなくなるため、いろいろな欲望を持ち「意味の世界」を豊かにしておくことが望ましい。

問題は次ページに続きます。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

社会学者の見田宗介みたむねすけさんは、真木悠介まきゆうすけの筆名も持っていた。締め切りを気にせず、書きたいものを書くときに真木の名を使うのだと雑誌で語っていた。そんな著書『気流の鳴る音』で、松尾芭蕉の旅に触れている。

芭蕉は松島を目指して40日あまりの旅をし、数々の名句を生む。松島では「奥の細道」に一句も残していない。もし松島に着く前に倒れ

たとしても、芭蕉はそれまでの旅を空虚だとは思わないだろう。松島は①旅に方向性を与えたただけだ。

そう書いた見田さんが問うのは、②私たちは芭蕉と正反対のことをしているのではないかということだ。生が永遠に続くように錯覚するなか、さしあたりの目的地、成果、結果にばかり目が行き、自分の歩いている道を見えていない、過すごしている日々をきちんと生きていない。

生せいそれじたいを充実させ「心のある道」を歩くべきだ。そんな文章を30年以上前に読んで以来、自分への戒めにしてきた。記者の仕事でいえば特ダネを求めるあまり、だいじなことを見過みすごしていいか。記事を完成させるため、取材相手を手段のように扱あつかってはいいか。

見田さんが84歳の生涯を閉じた。その仕事は、めまいがするほど多様である。消費社会の本質と格闘する。あるべき共同体を思い描く。死刑囚しけいしゅうの心理に寄り添う。

その著作が文学なのか、社会学なのか、と問われたこともあったという。③学者の枠わくをはみ出して、数々の分野への越境を重ねた見田さんにとっては、④褒め言葉であろう。

(朝日新聞「天声人語」より)

問 一、にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、あるいは イ、だから ウ、さらに エ、しかし

問二、——線①「旅に方向性を与えただけだ」とありますが、「旅に方向性を与え」とはどのようなことですか。その説明として最も適当なものの中から選び、記号で答えなさい。

ア、東北へ向かう道筋を決めるための到達点となること。

イ、名句を追求する旅の意義や目的を定める指針となること。

ウ、名高い景勝地への旅という聞こえの良い名目をつくること。

エ、作品の格調を高めるための表向きの目的地となること。

問三、——線②「私たちは芭蕉と正反対のことをしているのではないか」とありますが、見田さんのこの問題意識を受けて、筆者はどのように自戒していますか。具体的な内容が述べられている箇所を六十字以内で探し、最初と最後の六字をそれぞれ抜き出して答えなさい。

問四、——線③「学者の枠をはみ出して、数々の分野への越境を重ねた」とありますが、その内容が具体的に述べられている箇所を四十字以内で探し、最初と最後の五字をそれぞれ抜き出して答えなさい。

問五、——線④「褒め言葉であろう」とありますが、そのように筆者がいうのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、見田さんが社会学のみならず文学にも精通していることを認められたということだから。

イ、著作に対して意見や議論が生まれるのは、それだけ多くの読者がいる証と言えるから。

ウ、学問分野の区別に否定的な見田さんにとって、狙い通りの世間の反応となつていいるから。

エ、学問分野の隔てなく誠意を尽くして対象と向き合う見田さんの姿勢の表れと言えるから。

